

[討論]



国連大学サステナビリティ高等研究所
客員教授 / プログラム・アドバイザー
長尾 真文 氏

○丸山 ありがとうございました。続けて長尾先生よろしくお願いたします。

○長尾 長尾です。昨年に続いて今年も呼んでいただいて、どうもありがとうございます。きょうはたった3時間のシンポジウムの中で、田丸先生が話された初期の画期的な日本語教育プログラムの評価から、国際化の大きな動きの中で立教大学が存在意義を示そうとする大きな動きの中で、日本語教育センターの役割をどう評価するかまでカバーするわけですから、結構野心的なシンポジウムだと思います。ただ、昨年に続けてことしも呼んでいただいた率直な感想で、方向が見えてきたなという感じを持ちました。その流れで4つコメントさせていただきます。

最初は、池田先生が言われた、「ではこれから日本語教育センターは何をするのか」ですが、私は、「外向きの多様な内部評価をとにかくやっということうこと」と聞きました。私はこれは非常にいい方法だと思います。もう少し添えると、小澤先生が言われたような開発型評価を続けていけばいいのではないかなと思います。それが第1のコメントです。

第2のコメントは山口先生に対してです。日本語教育センターが立教大学の国際化の取り組みの中で、どういう役割を果たすのかとの問いかけに答える評価は、日本語教育センターだけを対象にしてもだめなんですね。大学のレベルで評価をして、国際化がどういうふうに進んでいるかという、大きな流れの評価の中で、では日本語教育センターは、他の部局との相対において何をやっているのかという、そういう評価でなければいけない。ですから第2のポイントは、立教大学はTGUをもらっているわけですから、TGUの評価と真剣に取り組まなけ

ればならないということなのです。私はこの3月まで、東大の柏の大学院で、文科省のリーディング大学院プログラムの特任教授として教えていましたが、それでも7年間、毎年2～3億円文科省からもらう補助金を使って、国際的人材の育成に向けて何とか形をつけて、先刻山口先生が言われたような刺激的なプログラムにし、例え文科省の補助金が途絶えても、プログラムとして続いていくようにしないといけないんですね。そうでないと、金の切れ目がプログラムの終わりになって、大学にとってはむしろマイナスになる。要するに淘汰される大学になってしまうわけです。東大でもそれを一生懸命やりました。私も一応、評価を専門としているので、学生と教員をたきつけて、評価の形をつくっていきました。今、文科省はグローバルリーダーを養成するという目的のために、いろいろなプログラムを提供しています。日本人の学生を「トビタテ」で海外に送るとか、スーパーグローバルとか、リーディング大学院もそうです。私は今も国連大学で文科省の委託事業として、日本の修士と博士の学生を、修士3カ月、博士6カ月、アフリカでの現地調査の実施に送る、グローバルリーダー養成プログラムに係っています。どのプログラムにも欠けているのは評価です。みんな評価が大事だと知っています。しかし、誰にでも説得力のある評価の形をつくっている大学はありません。私がいた東大のリーディング大学院プログラムでも、評価について専門的知識を必ずしも持っておられない、しかし研究者として著名な先生が1人來られ、それに企業の退職者の方や文科省、学振の人が評価チームとして來られました。たった3時間ぐらい、1回で評価して、それでSだの、AだのBだのと格付けします。Sがつけば喜ぶのですが、Aがついたプログラムと、Bが付いたプログラムとでは何が違うか、何でBがついたのか、はっきりしない。それは透明でもない。ただ、何となく最終審判みたいな形で、大学はそれを受けとめなければいけない。それに応えるように必死で変えていかなければいけない。これはどう見てもおかしい。

山口先生に期待したいのは、立教が本当にTGUで1つの国際化の方向をつくるというのであれば、それを自主的に評価し、その結果を外部に見せて、だから立教は信頼できると言われるようにすることです。そのための評価の方法論が確立されているかという、そうではありません。グローバルリーダーを養成するといっても、4年ここで勉強して、じゃあ何年先にグローバルリーダーになるかなんてわからないわけです。ですからインパクト評価といってもなかなかできな

い。ただ、毎年海外から立教のこのプログラムに來たいという学生の数が増えて、しかも、これは試験しているとわかりますが、受験生の質が上がってきたということが確認できたら、これはプログラムの評価としてある程度、指標的・計量的に示すことができます。それ以上に簡単な指標として、海外からの受験倍率がありますが、その上がり下がりも1つの客観的な評価の出し方だと思います。あとは実際に提供するプログラムの内容の充実を、きちんと内部評価で示すことです。先ほど小澤先生が言っておられたことを、国際化推進機構の中に加わっているいろいろな組織が、それぞれに実施する。その全体をひとつの立教評価モデルとしてつくるというのが非常に大事なのではないかと思います。それなしに、日本語教育センターが一生懸命、最初の池田モデルでやられても、それはそれとしていいですが、外へのインパクトが本当にあるかということ、私は、そこまでいかないのではないかと思います。

3つ目ですけど、これは研究と実践の組み合わせです。今私が言ったような機構レベルでの立教評価モデルを実施するためには、かなり研究をしないと行けない。今年あるいは来年にその形をつくれといっても無理ですから、それこそ機構が開発型評価で、毎年これから実施されればよいのではないのでしょうか。それには研究が不可欠ですから、ちょうど今、現在のこのプロジェクトを小澤先生の科研でやっておられるように、今度は立教の先生が自ら科研を取って、その科研を使い評価の方法について研究しながら、文科省のプログラムを評価するのが良いと思います。機構のロジックとしては、文科省に対する答えをまずつくとだと思えます。文科省チームが評価するだけでなく、中できちんと評価したものを提示すること。そして、その結果を全部 Web に載せて、いつも見られますという形で文科省に対する答えを出すことですそれからもっと大事なのは、海外の大学、あるいは日本の学生に対して、ああ、この機構のプログラムは、きちんと評価しながら、しかも誰にでもわかる形でプログラムづくりをしているのだということを示すことです。その形を見せ、評価の仕組みの信頼性を確保することによって、しかもそれを維持しないと行けないですから、質がだんだん上がっていくという意味で、研究と実践を組み合わせた機構レベルのモデル形成が実現するといいいのではないかと考えます。

最後のポイントですけど、そういう動きができたときに、日本語教育センターは何をするかです。せっかくこれまで先行して、2～3年、日本語教育センタ

一は評価と取り組んできたわけですから、そこに、ある程度の経験と、少なくとも関心と熱とパッケージで入っているわけですから、しかも日本語教育センターのセンター長の方は、機構の副リーダーというふうに聞きましたけれど、機構の中で、この副のポジションの日本語教育センターが評価の責任の立場になる。副機構長が、機構の評価の活動をバックアップするというふうに組んでいくと、中に1つの評価の力学が生まれます。ですから日本語教育センターとしては、これまでの評価の経験、知識、ノウハウを提供するということが1つ、それから副機構長としての立場を生かして、全体のシステムの評価に貢献することがもうひとつと、二重の貢献が考えられるのではないかと思います。以上です。(拍手)